

医学史 No.4

麻酔の発明

—— 手術の痛みをなくした革命の歴史

目標：1846年のエーテル麻酔の公開実験から現代の全身麻酔へいたる歴史を学び、痛みの除去が医療の本質に与えた変革・麻酔科学の倫理的課題・優先発見権争いが示す科学と人間の関係を論じられるようにする。

衝撃体験：歴史の転換点

導入：麻酔がなかった時代、外科医は速さだけが命だった。名外科医リストンの記録は大腿切断28秒。患者は叫ぶ、押さえる、切る——それが手術だった。

歴史の構造：民間療法（アヘン・アルコール）→ 化学的麻酔の発見（エーテル・クロロホルム 1840年代）→ 現代麻酔（気管内挿管・全身麻酔管理）

清光学院 AP SEIKO / スプリント医学史 No.4

採点者の視点 —— 合格答案と不合格答案の分岐点

採点者の視点

採点者の視点

採点者はここを見ている —— 麻酔の発明・手術の痛みの克服で合格答案はこういう「構造」をしている

① なぜ同じ答えでも評価が違うのか

清光学院の講師陣は、これまでに皆さんと同じ志を持った先輩受験生たちの答案を何千枚も採点し、合格・不合格の判定を下してきました。その経験から言えることが一つあります。

「正しい答えを出していても、なぜそう考えたのかが見えない答案は、採点者の印象に残らない。」

麻酔の発明・手術の痛みの克服では、*麻酔の医学史的意義の根拠*が答案の質を大きく左右します。

② 麻酔の発明・手術の痛みの克服で採点者が見ているポイント

「麻酔の発明が外科手術の適応を劇的に拡大した歴史的意義を示した答案」が採点者に「医学史を俯瞰している」と映る

💡 この授業の使い方

各問題のワンポイントには「採点者がどこを評価するか」の視点が含まれています。答えを出すだけでなく、根拠を一文添える習慣を意識しながら取り組んでください。

③ 総合型選抜・口頭試問でも同じ構造が問われる

採点者（大学教員）が口頭試問で確認したいのは「答えが出るか」ではなく「思考の構造を説明できるか」です。この授業で習得する「上から俯瞰する」視点は、あらゆる試験形式に通用します。

核心1：1846年 エーテルデモンストレーション

1846年 エーテルデモンストレーション：1846年10月16日、モートンがMGHでエーテル麻酔を公開成功。翌日の新聞「This is no humbug」。外科の歴史が変わった日。

核心2：優先発見権争いが示す科学倫理

優先発見権争いが示す科学倫理：モートン・ウェルズ・ジャクソンの3者が優先権を主張。特許・訴訟・精神病院・自殺——麻酔発見者たちの末路は知的財産と公共的発見の緊張を体現する。

核心3：術中覚醒と現代の麻酔倫理

術中覚醒と現代の麻酔倫理：術中覚醒（anesthesia awareness）——麻酔中に意識がある状態（発生率0.1～0.2%）。患者は痛みを感じながら声も出せない。ICと医療技術の限界。

 **続きは講義でご覧いただけます**

この教材には、採点者の視点・核心的な解法・入試問題・演習・まとめがさらに収録されています。

大学教授陣が設計した「普通の授業では出会えない接続点」を体験できる完全版は講義でご提供いたします。